

やまぶきは

埼玉及び近郊の和算研究の個人通信

(題字 伊藤武夫氏)

人間市の和算家

自宅から近い人間市の和算家については、『人間市史』などを手掛かりに調べようとした時期もありましたが、ほとんどわかりませんでした。

最近、人間市出身の侠客「黒須大五郎」を調べようとしていたら、大五郎のことは調べられませんが、偶然に和算家の「石田常五郎」の名を知りました。また人間市博物館の学芸員・工藤宏様から、金子に江戸からきた和算家があったことを教えて頂きました。直ぐに野口泰助先生の『埼玉県数学者人名小辞典』をみて、それが「飯河成信」であることを知りました。飯河成信を調べると色々な事がわかって来ました。

一、飯河成信

『埼玉県数学者人名小辞典』の飯河成信の説明は『日本人名大事典』(平凡社)から引用

第46号 平成二九年(二〇一七) 四月八日

発行部数 十五部 (不定期刊行)

発行者 東京都羽村市

山口 正義

されているようなので、まずその事典の内容から述べます。

「飯河成信(いかせいのしん)(天保九年(一八三八)〜明治二十一年(二八八八))は幕末、明治初期の数学者。幕府の士。御書院番 禄千百石。初め数学を馬場正統に受け、後に高久守静の門に入り、維新の際静岡に徙り移り、同七年東京に帰り、翌年大蔵省に出仕して会計に任じ、病を以て辞して武州人間郡上谷ヶ貫村に寄留し、十二年同郡南峰村校堂を新築し美禰(みね)学校と称し、のちに金子校、谷貫校を併せて金子校と称し、続いて校長となる。明治二十一年八月三十一日病歿、年五十一。上谷貫村に葬る。(川北本朝数学家小傳及び同補遺三上)」「『日本人名大事典(平凡社)より」

調べると馬場正統(一八〇一〜六〇)は和田寧(一七八七〜一八四〇)の門人で、高久守静(たかくしせい・もりしず)(一八二二〜八三)は正統の門人でした。もちろん和田寧は円理を大成した幕末最高の和算家(円理とは積分のこと)。

馬場正統は「業数学を父正督に受け、大いに数学に通ぜり。後ち和田寧が門に入り、円理の新法を受けた。これより正統が名益々高し」(5)というから一流の和算家であった。また正統は俳人で錦江と号し多くの研究書を残したという。川北朝鄰(ともぢ)(一八四〇〜一九一九)は正統に俳句を学んでいます。

高久守静は正統の門下で「漢学の力あり。また能筆なり。弱冠にして私塾を四谷に開き門人夥多なり。数理は容題に力あり。加うるに極数(微分学)に精神を用い、未だ和算家に普及せざる二次或は三次以上の極数に係る問題を撰出し一巻の書とす。名づけて極数大成術という」(6)というから守静も相当な実力者であったようです。成信は正統が亡くなった後、同門の守静に習っています。

飯河氏は『寛政重修諸家譜』(寛政譜)によれば長寛二年(一一六四)に美濃国岩瀧郷下川飯河の庄を給わたたのに始まり、その支流の方信(まさのぶ)が延宝八年(一六八〇)布衣を許され、元禄十年(二六九七)に全てで千百石を知行。次の俊信のときに御書院番に列す、とあるので成信はこの家系の可能性が高いと思われます。

一方、人間市博物館や図書館で飯河成信の足跡を探すもほとんど見つからず、また上谷ヶ貫の西光院の墓地で墓を探すも見つけられませんでした。

わずかに
『入間市史
通史編』に
は下図のよ
うな卒業証
書が掲載さ
れていて、



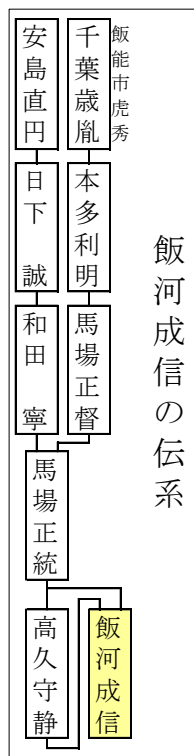
「美禰學校校長飯河芥舟」とある卒業証書（『入間市史通史編』より）

「明治十八年十月廿五日 美禰學校校長飯河芥舟」とある位でした。「芥舟」は辞書によれば「かいしゅう」と読み、「水の上に浮かぶ小さなこみ、小舟のたとえ」とあります。「芥舟」が飯河成信の号であることは後述の資料で明らかです。

この事典の出典に（川北本朝数学家小傳及び同補遺 三上）とありますが、これは川北朝鄰の『本朝数学家小傳及び同補遺』を指します。が、この資料の存在は『国書総目録』などで探してみましたがどうしてもわかりません。和算研究家の大矢真一（一九〇七〜九一）は『本朝数学家小傳』を「和算家の伝記に詳しい」と述べていますが…。

その代わりに朝鄰の『本邦数学家小傳』というのを探すことができました。『本朝数学家

飯河成信の伝系



小傳』と『本邦数学家小傳』が同じものなのかはわかりませんでした。『本邦数学家小傳』の最後の方に成信について次のようにあります。

「飯河権五郎成信 後二芥舟ト云フ天保九年八月二十日江戸四谷角筈ノ邸ニ生ル代々幕府ノ士ナリ氏業ヲ初メ馬場正統ニ受ケ後高久守静ノ門ニ入ル一奇士タリ維新ノ後武蔵国入間郡南峯村ニ閑居ス明治二十一年八月三十一日没ス歳五十一」

朝鄰曰飯河氏ハ余カ竹馬ノ學友タリ氏ノ逸事及ヒ巨細ノ傳記ハ高久氏ト共ニ別ニ記録スベシ」

これにより、川北朝鄰と飯河成信とは竹馬の友であり、朝鄰は成信の伝記を書くつもりでいたことがわかります。しかし、『高久守静君の伝』というのには確かにありますが、成信の詳伝はみつかりませんでした。実際に書かれたか疑問です。また「奇士タリ」とありますが、奇士とは「なみはずれた言行をする男の人」と辞書にあります。

筆者が調べた範囲で飯河成信を一番詳しく述べているのは、『増修日本数学史』にある成信の「注」です。次のようなものです。

「飯河芥舟、通称を権五郎という。実名成信。天保九

年八月二十日四谷角筈に生る。旧幕旗下の士たり。母は古賀謹堂の姉なり。幼にして数学を好み、馬場正統の門に入る。馬場氏没後、高久守静を師とし、勉学夜を以て、日に継ぐ。親族以て、狂とし、これを諫む。然れども、氏はこれを度外視し、一時謹慎の厄に逢えりと云う。明治維新の後ち、静岡に移り、明治七年東京に帰り、大蔵省に出仕し後ち病を以て職を辞し武蔵国入間郡上谷ヶ貫村に移り、学校を設け児童教育に従事せり。氏の数学における精密にして、殊に整數術に妙を得たり。児童教育の傍わら画形を以て、分數を作る。名づけて算法工見立分數と云う。川北氏はこれを小冊子に上せ公にせり。明治二十一年八月三十一日病死す。年五十一。以上川北朝鄰より」（林（鶴一））

「以上川北朝鄰より」が言葉による説明なのかわかりません（出典が明示されていません）。しかし、これにより成信のことが幾らかわかります。「奇士」の意味もわかるような気

がします。と同時に和算の実力も、伝系も含めて考える



報恩碑(碑文は井上頼園(権田直助門人)による)

と相当あったのだろうと推測できます。

残念なのは、既述のように入間に来てからの足跡がほとんど見つからないことです。地元の資料を調べても、わずかに前記の卒業証書と『上谷ヶ貫村誌考』(比留間一男著)に飯河芥舟の名が出ているのみです。不思議です。また、美祿学校の所在地だった現在の南峯公会堂地には「報恩碑」がありますが、これは美祿学校新設に尽力した梅田理平に関するもので、碑文も確認しましたが飯河芥舟のことはありませんでした。なお、和算の研究は入間に来る前までだったのではないかと想像しています。

(お墓でも見つかるの良いのですが！)

参考文献

- (1) 『日本人名大辞典』(平凡社、1979年復刻)
- (2) 『寛政重修諸家譜』(続群書類従完成会)
- (3) 『入間市史 通史編』
- (4) 川北朝鄰『本邦数学家小伝』『高久守静君の伝』(東北大和算ポータルサイト)

- (5) 『増修日本数学史』
- (6) 『明治前日本数学史』

他

二、石田常五郎

石田常五郎は、『郷土の人物展—その記録—』によれば次のようにあります。

「石田常五郎(天保5年(一八三四)〜明治二十七年(二八九四))は上藤沢の人。石田平蔵(明治十二年没)の子。父平蔵は農業の傍ら寺子屋の師匠として付近の子どもに読み書き算を教えていたので、幼少のころから学問好きで、ついに算術に抜群の力を發揮したと思われる。通称は常五郎、名は易孝、一顧と号して父のあとをついで寺子屋の師匠もしたが、華道にも通じて一家をなしていたといわれる。宮城流算術の免許を得ているから、算術(数学)については相当な学識をもっていたものと思われる」

宮城流免許は万延元年(一八六〇)に受けていて、宮城流十伝とあります。図からは師の名前が明確には解説できません。宮城流の祖は宮城清行で関西で盛んだったといいますが、流祖以外は著名な人はあまりいなく、マイナーな流派です。それだけに珍しいと思います。近辺では所沢の北野天神社の算額に宮城流の名が見える程度です。なお、石田家には史料は遺っていないよう

| | |
|---|---|
| <p>宮城流算術皆傳目 剪管術</p> <p>一求總數 一求加減數 (中略)</p> <p>右一巻者算術稽古不 悔依多年之執心不淺而 此度傳目之通令皆傳 者也仍而免許狀如件 万延元 庚申年 四月吉辰</p> <p>宮城清行九傳算学 豊田作左衛門□圭 宮城清行十傳算学 石田常五郎易孝</p> | <p>宮城流算術皆傳目 剪管術</p> <p>一求總數 一求加減數 (中略)</p> <p>右一巻者算術稽古不 悔依多年之執心不淺而 此度傳目之通令皆傳 者也仍而免許狀如件 万延元 庚申年 四月吉辰</p> <p>宮城清行九傳算学 豊田作左衛門□圭 宮城清行十傳算学 石田常五郎易孝</p> |
|---|---|

常五郎算術免許狀

です(入間市博物館学芸員の話)。また、免許にある「剪管術」は不定方程式の解法を言います。

上藤沢には、台石に「門人中」とある石田常五郎の墓があります。笠付角柱の墓です。

正面には「勝覺常伴信士 阿運盛光信女」、左側面に「施主 石田平太 石田新平」とあり、右側面には次のような碑文があります。写真に撮り解説しようとしたのですが、どうしても読めない文字がありますので、『入間市史

金石編』により補いました。

先生名易孝稱常五郎號一顆入間藤里人也其爲人孝友温恭特潛心於算學數年遂升堂觀奧及通挿華之道而成一家矣爾間弟子受業者踵接戶外諄々善誘孜孜能教至慈馨行恰如於時雨之化夫其容度廣深浩々焉汪々焉奧乎不可測惜明治廿有七年九月遭疾而歿焉歲六十有一郷人弟徒莫不咨嗟巖數知名失聲揮涕淚懷哀悼摩所寬念乃想與惟先生之德以謀不朽之事勒諸石表墓以傳明治廿有七年十月 生々識

「算学數年遂に升堂の奥を觀る」の「升堂」は辞書によれば、学問や芸術について造詣が深いことを指す言葉のようです。常五郎の和算の実力がどの程度であったかは、免状に剪管術のことがあることや、宮城流十伝であることなどから推測するしかありません（それなりの実力はあったようです）。



石田常五郎墓(3月25日写す)

参考文献

- (1)『郷土の人物展—その記録—』(入間市文化財研究同好会、昭和61年)
- (2)『入間市史 金石編』

三、その他の人

『郷土の人物展—その記録—』によれば、三ツ木台の三木三長(明治二十一年没、三十才)は数学・天文・測量に優れ明治の地租改正では父・長賢と共に活躍したとありますが、詳細は不明です。

和算は「体制の認知なきあそび」

『近世日本の科学思想』(中山茂、講談社学術文庫)を読んだ。正確にはその一章の「算家の世界」。可成り正確に和算の性格を述べていたように思う。その一節に「体制の認知なきあそび」というのがあり、概略次のように述べていました。

「和算は体制の認知は皆無であつて、対社会的に存在を主張できる何物もないのに、発展した秘密は何なのか。そこで「芸」が登場する。和算書は江戸期の出版目録では茶の湯、生け花と同じカテゴリーであつて、民間芸能としての発展しか残されていなかった。ただ芸は一般に感覺的快樂を求めめるのに対し、純

知的なものは学問と見なされることがある。学問的尊嚴を主張できないものでしかも知的ないとなみとしては、ほかに文芸・俳諧、さらに碁、将棋があるが、和算をして発展し、地方にも浸透せしめる要素は、共通した遊びの世界であるといえよう。それは旦那衆だけでなく、幕末には下層にまで拡がっていた。幕末になると蘭学、科学が国防との関係で武士層の注目を集めるのに対し、和算はかえつて平民のものとなつていく。ロジェ・カイヨワの『遊びと人間』に与えられた遊びの定義によれば、①自由な活動②隔離された活動、

③未確定の(答が初めからわかつていない)活動、④非生産的な活動、⑤ルールのある活動、⑥虚構の活動、となつていくが、旦那衆の和算愛好活動は見事にこれら六つの条件をすべて満たしている」と。⑥は何を指すのか少々疑問だが、全体的には「なるほど」だ。

※ロジェ・カイヨワ(1913~1986)は、フランスの文芸批評家、社会学者、哲学者。

編集後記

今年の桜の開花は例年になく遅く、やっと満開近くなったら小雨模様が続いて少々がっかり。テレビで見た秀句。情景が浮かぶ。

野良犬の吠える沼尻花筏(東国原英夫)